須磨には、いとど心づくしの秋風に、海は少し
格助 副詞 格助 下二・体 格助 副詞
遠けれど、行平の中納言の、関吹き越ゆると言ひ
形容詞・已 接助 格助 四・用
けむ浦波、よるよるは、げにいと近く聞こえて、
過去伝推「けむ」体 副詞 副詞 形容詞・用 下二・用 接助
またなくあはれなるものは、かかる所の秋なり けり。
形容詞・用 形容動詞・体 連体詞 格助 過去「けり」終 断定「なり」用
（おまえ）
御前にいと人少なにて、うち休みわたれるに、
格助 副詞 形容動詞・用 接助 接頭語＋下二・已 存続「り」体 接助
一人目を覚まして、枕をそばだてて四方の嵐を
格助 四・用 接助 格助 下二・用 接助 格助 （よも） 格助 格助
聞き給ふに、波ただここもとに立ち来る心地して、
四・用 四・体 接助 ⓢ作者→源氏 副詞 格助 カ変・体 サ変・用 接助
涙落つともおぼえぬに、枕浮くばかりになり に
上二・終 格助 下二・未 打消「ず」体 接助 四段・体 副助 格助 完了「ぬ」用 四・用
けり。琴（きん）を少しかき鳴らし給へるが、我ながらいと
過去「けり」終 格助 副詞 四・用 四・已 完了「り」体 ⓢ作者→源氏 格助 副詞
すごう聞こゆれば、弾きさし給ひて、
形容詞・用（ウ音便） 接助 下二・已 四・用 接助 四・用 接助 ⓢ作者→源氏
恋ひわびて泣く音（ね）にまがふ 浦波は
上二・用 接助 四・体 格助 四・体 係助・強
思ふ方（かた）より風や吹くらむ
四・体 格助 係助・疑 現推「らむ」体 四・終
とうたひ給へるに、人々おどろきて、めでたう
格助 四・用 四・已 完了「り」体 ⓢ作者→源氏 接助 四・用 接助 形容詞・用（ウ音便）
おぼゆるに、忍ばれで、あいなう起きゐつつ、
下二・体 接助 四・未 接助 可能「る」未 形容詞・用（ウ音便） 上一・用 接助
鼻を忍びやかにかみわたす。
格助 形容動詞・用 四・用
「げにいかに思ふらむ、わが身一つにより、親はら
副詞 副詞 現推「らむ」体 格助 格助 四・用
から、かた時たち離れがたく、ほどにつけつつ思ふ
形容詞・用 格助 下二・用 四・終 接助
らむ家を別れて、かく惑ひ合へる。」とおぼすに、
現推「らむ」体 格助 接助 四・已 存続「り」体 四・体 接助
いみじくて、「いとかく思ひ沈むさまを、心細しと
形容詞・用 接助 副詞 副詞 四・体 格助 形容詞・用 格助
思ふらむ。」
四・終 現推「らむ」止

須磨では、いよいよ様々にもの思いを誘う秋風が
吹いて、海は少し
遠いけれど、行平の中納言が、「関吹き超ゆる」と
読んだという
浦波が、夜毎に、本当にたいへん近く聞こえて、
このうえなく悲しいのは、このような場所の秋で
あった。
（源氏の）お側にはたいへん（お供の）人が少なく
て、皆が寝静まっているのに、
（源氏は）一人目を覚まして、枕から頭をあげて四
方の嵐の音を
お聞きなさっていると、波がすぐここに打ち寄せ
てくる気がして、
涙がこぼれたとも思えないのに、枕が浮くほどに
なってしまった。
琴を少しかき鳴らしなさったけれども、我ながら
たいへんもの寂しく聞こえたので、弾くのを途中
でやめなさって、
恋しさに苦しみ泣く声に似た浦波の音は、
《「泣く」のは都の人（源氏という説もある）》
私のことを思う都の方から吹いてくるために
起こるのだろうか。
とお詠みになると、寝ていた（お供の）人々は目
を覚まして、素晴らしいと
思うにつけても、（源氏の心中を思うと悲しみが）
こらえきれず、なんとなく起きてきて、
次々に鼻をそっとかんでいる。
「本当に、（お供の人々は）どう思っているのだろ
か、私一人のために、親や兄弟が、
わずかな間も離れにくく、それぞれに応じて思っ
ているだろう家を離れて、このように一緒にさま
よっている。」とお思いになると、
ひどくかわいそうで、「このように自分が思い悩
んでいる様子を（見ると）、（彼らは）心細いと思
うだろう。」

©高校古文No.1授業ノート　https://kobun.info/